

私たちの誰もが「故郷(ふるさと)」をもっていますでしょう。それは、主イエスも例外ではないようです。帰るべき、本来主ご自身がいるべき地上のふるさと、それは一体どこでしょうか。今朝の聖書箇所には、そうした「**自分の故郷**」という言葉が出て来ます。

イエスと弟子たち一行は、サマリアを後にして、本来の目的地である主が育ったガリラヤへと向って行かれ、到着した時のことが記されています。その文中で、著者ヨハネはわざわざ44節の挿入句を入れています。「**イエスご自身は、『預言者は、自分の故郷では敬われないものだ』と証言されたことがある**」のだと。ところが続く45節の前半には、「**ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した**」と記されている。矛盾しているように思えます。これはどういうことなのでしょう。

この部分は学者によって解釈が分かれるところなのですが、おそらく文脈(45節や48節など)から考えて、「**ガリラヤの人々**」が歓迎したのは、超自然的な力で病気を癒したり悪霊を追放したりするのを「**イエスがなさったことをすべて、見ていた**」からであって、真の信仰ではなかった。そのことを表しているのだと思います。主イエスを歓迎したのは——サマリアの人たちとは対照的に——“預言者”としてより、むしろ病の治癒者として歓迎したのでした。

翻って、私たちはどうでしょうか。主イエスにとって、今日の「**自分の故郷**」とは、実は私たち《教会》のことなのではないでしょうか。私たちも、教会も、この箇所におけるガリラヤの人々のように、主イエスを歓迎しているように見えて、実は自分の願いを第一としてイエスを救い主として敬っていない、ということになってしまうことがあるのだと思います。それでも、主の方はそんな私たち教会のことを御自分の「ふるさと」と呼んでくださるのです。